



## 特別寄稿

# 桂坂の計画について

神戸国際大学 経済学部  
国際文化ビジネス・観光学科

白砂 伸夫

ここでは桂坂がどのように作られてきたのか、私が計画に参加し、経験したことを話したいと思います。桂坂のまちづくりの構想は1982年から始まり、1985年に『西京「桂坂」自然環境形成基本計画』としてまとめられました。この報告書をまとめるにあたり、各分野の多くの先生方が知恵を出し合い、議論する中で桂坂の骨格が出来上がってきました。建設当時、『西京「桂坂」自然環境形成基本計画』をバイブルと呼び、このバイブルに基づきまちづくりがはじまりました。この計画書は2つの骨子からなっていて、その1つは失われた自然の再生であり、もう1つは桂坂の文化をどのようにつくり上げていくのかということでした。

まず自然の再生については、大枝の丘陵地を削り、谷を埋め立て宅地開発が進められる中、日本の成長期であり、既に洛西ニュータウンが開発し終わっていたとはいえ、京都西部の丘陵地の自然を大胆に破壊してもいいのか、計画者の多くはそうのように感じていたと思います。だからこそ、誰もがこのプロジェクトを真剣に捉え、素晴らしいまちにしよう、と意気込みで計画し、実行に移されました。セゾングループの代表であり、文化人でもあった堤清二氏は特にそのような気持ちが強かったのでは無いでしょうか。セゾングループのなみなみならぬ桂坂への力の入れようはそのことを物語っています。

したがって、丸裸になった大地にいかに自然を取り戻すか、それが最大のテーマでした。自然を再生するためには、自然を漠然と捉えるのではなく、まず自然のヒエラルキーを構想しました。裏山に広がる野生生物の生息する自然を「大自然」と位置づけ、まちの中の公園や緑道といった

公共の自然を「中自然」、個人住宅の庭を「小自然」と称して、さまざまなレベルで自然をまちに導入することを計画しました。その中心となるのが「緑の大河」計画です。「緑の大河」は裏山の大自然からまちに自然が流れ込むように、桂坂の中央に野鳥公園、古墳公園、桂坂公園といった自然生態的空間がまちを分断するように配置しています。一般的なまちづくりでは中央ゾーンは利便性が高く、また地価のことを考えると商業地区にするのが常套手段です。ところがこの土地利用計画上、重要な場所を「緑の大河」として、自然空間に置き換えられているのが桂坂の大きな特徴です。

野鳥公園は、今見るとまったくの自然の池として風景に溶け込んでいますが、この場所に流入する水量と蒸散量を計算して作られた人工の池であり、野鳥の生息空間としてデザインされたものです。そして、この池と新たな森を作ってから3年間、この場所は封鎖されました。野鳥に安心して住んでもらうためです。そして現在では100類近くの野鳥が生息するようになりました。計画当初、「野鳥の嫌いな人は、このまちに住まないでください」というキャッチフレーズを議論したことも懐かしい思い出です。

緑道は野鳥がまちにやってくるためのルートとして裏山の大自然から連続していて、ポイントには野鳥の目印となるエノキやクスの大木を植栽しています。さらに緑道や公園には桜、紅葉、藤、躑躅といった京都の景観を代表する植物を植栽し、石や木といった自然素材を使うことで、京都の自然文化的景観を再現し、住民の方々に四季折々の風情を楽しみながらまちを巡ってもらえる

花回廊として計画しました。公園は花回廊の要所として桂坂らしい、住民の皆さんに親しんでいただけの憩いの場として計画しました。その当時の京都市の指導は、公園には三種の神器とも呼ばれていたブランコ、滑り台、砂場を設置しなければなりません。昔の公園を思い出していただければわかると思いますが、ほとんど樹木がなく、広場にこのブランコと滑り台、砂場があるだけでした。桂坂の豊かな自然を享受し、コミュニティの場となり、四季を愛で、老若男女が楽しめる公園をデザインするのに、市との協議を含めて1つの公園をデザインするのに1年以上かかりました。また野鳥公園からの緑道など、緑道の中に水路のある緑道がありますが、当時、水路は維持管理を考えて、緑道は水路と分離しなければなりません。それではせっかくの水辺空間が生かされない、水路と緑道が一体となった水辺の緑道をつくり上げるために、この時の協議は2年間にも及びました。

もう1つの桂坂の文化の創造は、京都の西方にあって、いかに京都の文化を受け継ぎ、さらに桂坂らしい新しい文化の形成が大きなテーマでした。その1つが「道文化」の創造でした。昔から、葵祭や祇園祭のような京都を代表する祭りは、道を中心に行われてきました。また庶民の地藏盆のような祭りも道が舞台です。しかし車社会が発達すると、道は単なる交通路線になってしまい伝統文化を営む場ではなくなってしまう。「道文化」という発想は道を生活の場に、文化の営まれる空間として再び復権することでした。けれども、いくら「道文化」と叫んだところで、車が傍若無人に通行したのでは道の復権には繋がりません。そこで示された考えは、自然にヒエラルキーを導入してまちづくりに生かしたと同じように、道路もヒエラルキーにより構成することでした。車中心の道路を幹線道路、住宅周りの道路を安全

でかつ人々のコミュニティの場となる細街路として計画しました。幹線道路と細街路を結ぶ道をコレクター道路という位置付けにしました。車は幹線道路からコレクター道路を通過して人間中心の細街路に入っていきます。それだけでは道が細くなる分、危険度も増すので、車のスピードを落とす仕掛けを考えました。それが道に出っ張りを生かすハンブとフォルトです。ハンブは道路の一部に盛り上がり部分をつけて車のスピードを落させ、フォルトは道路に植栽帯を設け車がまっすぐに進めないようにする仕掛けです。この考えは既にボンエルフと呼ばれヨーロッパでは盛んに建設されていました。その考えをこの桂坂で生かそうと、許可を得るために、ハンブやフォルトのある細街路を再現した実験道路を1億円の費用を投資し、現地に建設しました。この実験道路に車両や消防車を走らせ、ようやく許認可を得ることができました。現在、桂坂が他のまちと違って感じてもらえるのは、このような様々な試みの上に成り立っているからです。いつまでも桂坂が、みなさんに愛される桂坂であって欲しいと思います。

---

## PROFILE

---

### 白砂 伸夫 氏

神戸国際大学 経済学部  
国際文化ビジネス・観光学科 教授

#### ■主な受賞

- ・ベルギー：ゲントフローラリー兵庫県出展庭園：国際庭園コンテスト2位、デザイン特別賞受賞
- ・建設省：まちづくり月間賞
- ・六甲アイランドCITYローズガーデン：花のまちづくり国土交通大臣賞、兵庫県知事賞
- ・日本造園学会：造園学会賞
- ・第18回世界バラ会議：Literary Award

#### ■主な著書

- ・白砂伸夫集作品集
  - ・住まいの空間構成図解住居学
  - ・白砂伸夫作品集Ⅱ『The Rose Garden』
  - ・まちづくりDIY
  - ・「現代の結婚と婚礼について考える」等
-